

堀
辰雄

黒
髪
山



黒
髮
山

源氏物語の「總角」あげまきの巻で、長患ながわずらいのために「かひななどもいとほそうなりて影のやうによわけに」、衾ふすまのなかに雛ひいなかなんぞの伏せられたようになつたきり、「御髮みぐしはいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕よりおちたるきはの、つやつやと」した宇治の姫君が愛人の薰かおるの君たちにみとられながら、遂に息を引きとつてしまふ。そのとき薰の君が「夢かとおぼして、御殿油おおとなぶらをちかうかかげて見たてまつり給ふに、隠したまふ顔もただ寐たまへるやうにて」、なんだかいつまでもそのま

まの姿にして、置いておきたいほどのいじらしい気がしながら、「御髪をかきやるにさとうちにほひたる、ただありしながらのにほひに」何とも云えず切なくなる心もちを描いている。私はそこを読んだとき非常に感動した。

若く美しい女のもう冷たくなつた亡骸なきがらを描いて、そのかき乱れた髪におの毛だけがまだ生きているときと同じように匂うところを書き添えたのは実に効果的である。これほど簡潔で深い印象を与える死の場面はそうよそにあるものではない。私たちの遠い祖先はすでにこういう効果を知っていたのかと思つた。

そこにはもう円熟した物語作者がいる。人間の死に対してもあまり怯ひるまず、仏教などで鍛え上げられた、透徹した観念をすでに持った人の目であつたにちがいない。

*

この頃私は万葉集をしばしば手にとって見ているが、そんな源氏物語などの頃とは異り、宗教思想が未熟だつたせいか、生と死との境界さえはつきり分からぬ古代人らしく、

秋山に黄葉もみじあはれとうらぶれて入りにし妹いもは待てど

来まさぬ

とか、また、

秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道やまじ知らずも
などという考え方でもって死者に對している。これは
歌というものの性質上、わざとそういう原始的な素朴な
死の觀念を借りて、山に葬られた自分の妻を、あたかも
彼女自身が秋山の黄葉のあまりの美しさに憑つかれたよう
にしてみずから分け入ってしまったきり道に迷つてもう
再びと歸つて来ないように自分も信じておるがごとくに

歎いて、以^もって死者に対する一篇のレクイエムとしたのかも知れない。

万葉の頃の悼亡の歌には、直接に自分の歎きを痛切に吐露^{とろ}したものよりも、そうやって死者の葬られた山を対象とし、あるいは空しくなった家の日ごとに荒廃してゆく有様や、故人の遺物である木や花や鳥などを対象としたものが多いようである。肉体が死んでも魂は分離して亡びないことを信じていた古人は、深い山の中をさすらっている死者の魂を鎮めるためにその山そのものの美しさを讃^{たた}え、また、死後彼らの居^{いどころ}処や木々を払わずにそこ

に漂っている魂の落ちつくまで荒れるがままにさせ、と
きおりその荒廃した有様を手にとるようにさながらその
死者の魂に向っていうようにいう、——そんなことを私
は万葉の挽歌ばんか作者をよみながら考える。万葉人たちが実
際の信仰としてそういう考え方をしていたか。あるいは、
もっと古代の人たちの信仰の名残りから、その中にある
生活感情を再現しようとしたところに彼らの文学があっ
たのであろうか。

山吹の立ちよそひたる山清水汲やましのみずみにゆかめど道の知
らなく

これも挽歌の一つである。万葉学者の一人がこの歌の第一句から第三句までが「黄泉」こうせんの和訳であることを発見した。周囲に山吹の黄いろい花の咲いている泉は即ち黄泉だということに気がついたのである。そうなのかも知れない。そう云われないうちでいると、これでも悼亡詩なのかと思うくらいの、明るい感じをさえこの歌は誰にでも与えるだろう。しかし死んだ貴女のために、山の中にはいって行かれた彼女の魂を鎮めるための祈りとしての合唱のような種類のものだとしたら、こういう歌もそれが挽歌としてはつきり分かってくる。そして死から来る

じめじめとした感じのない、清冽せいれつな後味を跡に残った人達の上に与えることが出来るのである。

万葉人としても死後の人体の醜悪を知らないでいたわけではなかったろうが、否、それを後代よりもよく知り、それに対する恐怖の一層はげしかつたあまりに、彼らの死者を哭こくする歌はいよいよ切なく美しくならなければならなかったのである。

*

奈良へは、二年前の若葉の頃、じんざいきよし神西清と一しよに往
 った。

誰でもそうするように、あきしのでら秋篠寺、とうしようだいじ唐招提寺、薬師寺、
 法隆寺などを廻って歩いたが、古い仏たちを拝する傍かたわ
 ら、私は古い大和の村々や野や民家や、ことに里近くの
 山々を見ることを楽しんだ。

万葉びとがこれらの村や山々に彼らのいわば前宗教的
 (pre-religious) な生活を托しながら小さな喜びや悲し
 みを歌い続けていた間に、一方ではすでに、今日もなお
 残っているこういう大きな寺が建立され、大きな仏たち

が製作せられていたのだということとは不思議な心もちがしてならなかった。それほどその二つのもの——無智にちかい土俗的な信仰の中に隠れている万葉びとと、仏を製作しつつあった本当の信仰に目覚めた人たちとの間には互に共通しあったものがほとんどなかったようだからである。前者が後者のために遂に大和や山城から逐おわれ、遠い国々を彼らの歌を携えたまま流浪し出す日はそのときすでに近づいていたのである。

私は毎日のように古い寺々を歩き、古い仏たちを拝しながら、ほとんど万葉の歌を口に上らせなかった。新薬

師寺へ行く途中の、くずれた築泥ついにじがちの道などは好きで何度も歩いたが、私はそこを通りながら思いがけず伊勢物語の一節などをなつかしく思い出すような気分にさせられるようなことはあっても、家持やかもちの歌ひとつ浮んで来なかった。万葉の歌はいまはもう大和の村々にも生きておらず、むしろ私たちの平凡な日常生活の奥深くにかえってひよいと見出されるようなときにだけ本当に私たちに生きてくるのではないかとさえ思えたほどだった。

だが、大和の村々を歩き疲れて宿に着き、夜ふけていつまでも目を覚まして昼間見てきたさまざまな事物を思

い浮べているようなときなどには、どうかすると熱心に見てきた古い仏たちの顔よりも、木深い山の奥にいまだに奇蹟的にそのまま埋まったきりであるかも知れない死んだ古代人のひとり取り残された淋しそうな姿などが、いまにも目に見えて来そうになったりしたこともないではなかった。

*

神西が都合で先きに帰京し、私はそれから三四日ひと

りで奈良に止まることになったとき、私はもう古い寺々
 は訪れず、ただぼんやりとそこいらの村々を歩いて暮ら
 すことにした。

私は卷向山まきむくやまや二上山ふたがみやまなどの草深い麓ふもとをひとりでぶら

ぶらしながら、信州の山々を見馴れている自分のような
 者にも、それらの山そのものとしては何らの変哲もなく
 見える小さな山々に対して一種異様な愛情の湧いてくる
 のを感じ出していた。いまから千年以上も前、それらの
 山々に愛する者を葬った万葉の人々が、そのとき以来そ
 れまでただぼんやりと見過ごしていたその山々を急に毎

日のように見ては歎き悲しみ、その悲歎の裡うちからいかにその山が他の山と異り、限りないそれ自身の美しさをもっていることを見出して行つたであろうことなどを考えていると、現在の自分までが何かそういう彼らの死者を守っている悲しみを分かちながらいつかそれらの山々を眺め出しているのだつた。そういうこちらの氣のせいか、大和の山々は、どんなに小さい山々にも、その奥深いところひそに何か哀歌的なものを潜ひそめている。

奈良を去る前日、私は「大和雜記」という本を読んでいたら、奈良山の一部に人麻呂歌集などにも出ている黒くろ

髪山かみやまという山があり、そこから法華寺村ほっけじの北方の歌姫うたひめという部落に出る旧道のあることを知って、ちよつとその黒髪山とか、歌姫という美しい地名に心をそそられて、その山越えをしてみたくなった。そこでその翌朝、私は奈良坂の上までバスで行き、元明、元正両天皇の御陵のあたりから大体の見当をつけて、山のなかへは行って行った。二つのみささぎは通り過ぎた。もう昔の佐保山さほやまである。私は手にしていた参謀本部の地図に大体黒髪山らしいものの印をつけておいたが、その山の中はまださほど深いとも思われないのに、小さなそま柚道が多くて、私に

はすぐその地図が何んの役にも立たないことを知った。私はもうあてずっぽうにそれらしい山を探して見るより仕方がなかった。

そうやって少し歩いて見ていたが、てんで見当がつかず、こんな工合では黒髪山を捜すことは先ず断念した方がいいと思い、せめて歌姫の方へ出る旧道でも見つけようとして後戻りをしてみたりしていたが、どれがさつき通って来た道かなんぞも分からなくなり、すこし困ったことになってきたなと思った。このまま、この山中に迷っていつまでも自分がさまよい続けているようなことに

でもなれば、私は万葉びとに考えられていたような、山に葬られた死者の死後の姿そっくりではないか。ただあたりは若葉の明るい山で、私の上に一めに黄葉もみじばが浴びせられるように散っていないのがちよつと興そを殺ぐ。と、そんな暢気のんきなことを考えながら、もうちよつとこのままこうして自分をそんな死人に擬して山の中をさ迷って見て見たいような気もしているうちに、いくら歩いても同じところばかり歩いているようなので、私は一方ではなんだか本当に自分が佐保山の奥に迷い入ったような不安をさえ感じ出して来た。しかし、どこまでいっても、山

は若葉のせいか、非常に明るかった。明るいなりに、山は無気味にしいんとしていた。誰一人にも行き逢わず、私は小一時間もそんな山の中をだんだん心細くなりながら歩きまわっていたが、ときどき古代人の幻想したような木の葉をいっぱい浴びた死者のあわれ深い姿が、自分の裡に気味わるいほどまざまざと蘇って来てならなかった。

ようやく私は自分の行く手に大きな池の一部らしいものを認め、そっちへ近づいて行って見ると、それが聖武しょうむ天皇陵の近くの池であるらしいことを地図で知り、自分

の目標からだいぶ外れて来たことを認めしたが、そこから
はもう法蓮ほうれんの村がすぐ近そうなので、半ばほっとした。

結局、実際に存在しているのだからかいないのだから分から
ないような黒髪山は見当さえつかず、ただそのまわりを
うろろと歩いていただけだった。それでも、その山歩
きは私には決して無駄ではなかった。私はその小一時間
ちかく「万葉的に」自分が死んでいたと云えば云えるよ
うな、子供らしく微笑ほほえましい想像から、その奈良におけ
る最後の日をいまだに忘れがたく思っている。

日本文学電子図書館

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行



日本文学電子図書館